

調査記録

かつて浦幌で操業していたバット工場について — 聞き取り調査と関連資料 —

持田 誠¹⁾

The "Bat Factory" once operated in Urahoro.
- Interviews and related materials on "Fukuzawa Manufacturing Co".-

株式会社福沢製作所は、1958（昭和33）年から1984（昭和59）年まで、浦幌町字寿町110番地で操業していた、野球で用いるバット製造を主としていた工場である。地域の人々からは「バット工場」「福沢バット工場」などと呼ばれていた。1977（昭和52）年には、50万本のバットを生産し、全国生産量の30%以上を占めるに至り、NHKのテレビ放送や雑誌で特集をされるなど（関矢1983：図11）、注目を集めた。

日本の木製バット生産については、脇田・松下（2015）が原料木の種類から流通に関して、一連の流れや時代変化をまとめている。また、1980年代における北海道の資源量と流通の現状については村木（1985）の報告がある。こうした資源量や流通過程に関する報告がみられる一方、生産現場の実態についての記述は多くない。

浦幌町立博物館には、福沢製作所の会社案内（図1）、バット製材見本（図2）と製品（図3、図4）が収蔵されている。これらの資料に関する情報の補完と、生産現場の実情について記録するため、当館では、福沢製作所について、経営者であった福沢祐介氏（現在は中川郡幕別町札内に居住）に聞き取りを実施した。また、聞き取りにあたり、福沢氏から同工場に関する写真を複製させていただいた。

本稿では、「バット工場」だった福沢製作所の歴史や概要について、聞き取りの内容を中心に、収蔵資料や複写させていただいた写真とともに報告し、浦幌町の林産業史上、重要な存在である同工場に関する記録資料とした。

調査にあたり、福沢祐介氏、まゆみ氏には当館まで足をお運びいただき、貴重な証言や資料の提供など、多大なご協力を賜った。

また、同氏への聞き取り調査に際しては、浦幌町立

博物館ボランティアである久我サトエ氏に仲介の労をとっていただいた。

旭川市の齋藤木材株式会社について、富良野市立博物館の泉団学芸員に資料調査の協力をいただいた。

関係された皆様方に深謝する。

なお、資料では福沢製作所の表記について「福澤」「福沢」の二種がみられるが、本稿では原則として「福沢」に統一した。

1. 文献による福沢製作所に関する記述

『浦幌町史』では「株式会社[㊦]福沢製作所」として、次のような説明がある。

昭和三十三年（1958）有限会社[㊦]福沢製作所として野球バット製造を開業。昭和三十八年（1963）チップ工場を増設、昭和四十二年（1967）三次製品製造のため、乾燥室二基及び仕上工場を新設、翌四十三年（1968）年株式会社として、資本金400万円に改組、N・H・K十勝ジャーナルにおいて、道東一円に紹介される。野球バットの生産高は、昭和四十三年（1968）度において、全国バット使用量の一二%を占める四五万本といわれ、総売上高8,000万円を算える。工場敷地は、1500坪、建物は350坪、従業員は、25名の工場である。代表取締役社長は、福沢源太郎、専務取締役は、福沢弥太郎の兄弟製作所として有名である。〔一部漢数字を算用数字に置き換え〕

また、『浦幌町百年史』では、「(株)福沢製作所(寿町)福澤源太郎」として、次のように記述している。

野球バット生産が主で、通称バット工場と呼ばれていた。当初はバットの素材作りであったが、「学研」の協力で乾燥工場を建て、ほぼ完成品を

1) 浦幌町立博物館 〒089-5614 北海道十勝郡浦幌町字桜町16-1

出荷するようになった。しかし、野球人口の減少など種々の条件が加わりバット部門を縮小し、広葉樹を主とする製函材ほか広葉樹材の挽き立てに変わったが、木材界の不況によって廃業した。

浦幌町商工会発行の『うらほろ商工ガイド』では、次のように概要が記されている。

株式会社福沢製作所

業務内容 野球バットの製造ならびに教材関係一切、大人用50%、少年用50% 少年用の完成品に関しては、全国第一位の生産量を獲得し、スポーツ店、量販店に好評をばくしている。

特 色 バットの生産に関しては、十勝、釧路一円の山から（道有林、民有林）伐採せし樹令100年以上のタモの原木を、第一工場にてバットの原形に荒引きし、更に天乾を行い選別したる良材のみを第二工場にて人工乾燥し、第二木取をなし超仕上機にかけ規格通りのゲージに製作する。当工場の特徴は、原木から製品まで一貫作業による工程で製品が出来るゆえ他のメーカーに見られない特徴といえよう。現在、科学的に更に強靱を増加すべく、鋭意研究を続けている。

2. 浦幌町立博物館所蔵資料

(1) 福沢製作所会社案内『Fukuzawa's BAT』(図1)

- ・資料番号2001-406 (分類7715)
- ・体裁 B5判 モノクロ、一部カラー、6頁+表紙・裏表紙
- ・寄贈 浦幌町役場
- ・備考 表紙の浦幌町市街地写真に、手書きで福沢製作所の位置が書き込まれている。取締役有福澤源太郎、専務取締役有福澤弥太郎、常務取締役に福澤祐介（本調査での聞き取り対象者）、深沢泰三の名がある。工場従業員、男子12名、女子18名の記述。浦幌町の本社・工場のほか、東京都渋谷区松濤2-7-12に東京営業所が所在する旨の記述がある。表紙に会社の英語表記があり、Fukuzawa sporting goods Mfg. Co. Ltd. と記述されている。

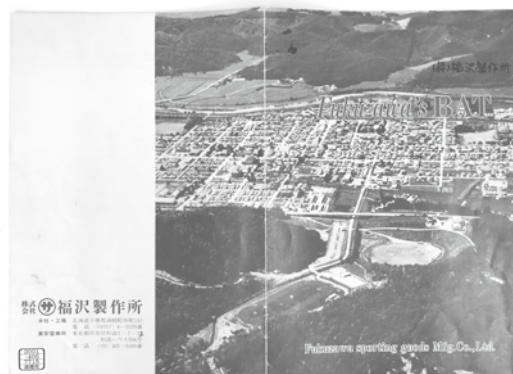


図1 福沢製作所会社案内『Fukuzawa's BAT』

(2) バット製材見本 (図2)

- ・資料番号2020-288、289、290 (分類6917)
- ・角材、角材から荒く削り出したもの、ほぼ完成形のもの3点。
- ・寄蔵者不明で、旧浦幌町郷土博物館で収蔵していたもの。資料番号は2020年に新たに付与している。



図2 バット製材見本

(3) 軟式ジュニア用木製バット (65) 青色 (図3)

- ・資料番号 2018-519 (分類6917)
- ・寄蔵者 楯省造
- ・備考 福澤バット工場製作

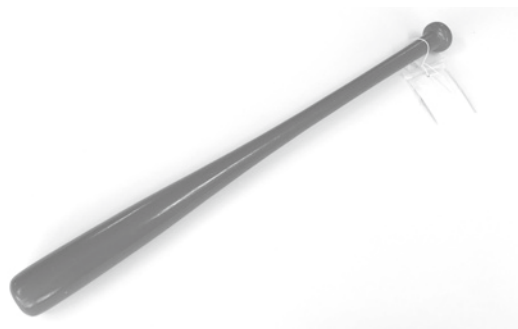


図3 軟式ジュニア用木製バット

(4) 福澤バット工場のバット (図4)

- ・資料番号 2020-267 (分類6917)
- ・寄蔵者 土本伸重



図4 福澤バット工場のバット

(5) 福澤バット工場写真 (図7～10ほか)

- ・資料番号 2020-294 (分類1640)
- ・点数 174点
- ・寄蔵者 福澤祐介
- ・備考 プリント判をスキャンして複製したもの。

3. 聞き取り

聞き取り年月日 2020年4月10日

聞き取り対象 福澤祐介 (福澤製作所元代表取締役社長)・まゆみ

調査者：持田誠 (浦幌町立博物館学芸員)

場 所：浦幌町立博物館学芸員室

凡 例：持田＝持田学芸員、福澤＝福澤祐介

備 考：活字化にあたって、一部の表現を変更している。個人の氏名について、漢字表記が不明の場合はカタカナ表記もしくは記号で示している。

(1) 福澤家の入植時期やご家族のこと

持田：福澤さんの家系は加賀から来られたようですが、いきなり浦幌に入られたんですか？

福澤：加賀から一回札幌に行ってすぐ旭川に。齋藤木材 (註1) って言ったかな。㊦の屋号 (写真5) はそこから受けて。それでいろんな山の造林造材とか…。



図5 福澤製作所の㊦の屋号

持田：なるほど、それから浦幌に入られたということですか。浦幌に来られたのは大正か昭和に入ってくるくらいですかね。

福澤：そうですね、きっと。

持田：ここの創業は〔昭和〕33年 (1958年) だから、だいぶあとですね。

福澤：ずっとあとですね。株式会社になってから。

持田：戦前に木材商として浦幌に入られて。

福澤：浦幌に入ったときに造材と独立した形になった。それで昔は飯場？みたいな、そこで北村商店もそうですけど、みんなそれぞれ店もやりながらしていた。そのうち米は戦争の米穀通帳で統制になって手放したこともあったと思うね。米とか酒とか、タバコはどうだったかわからないけど。

持田：福澤さんがお生まれになったのはその商店の方ですか？

福澤：はい。戦後は山から手を引いています。というのは、うちの父親の親が亡くなって、それでうちの父親も戦争に行きたくないから、上浦幌で国民学校の先生をやって。そんな話はよくね、本別が空襲にあった時に自分の自転車が上浦幌でやられたとか言っていて。

持田：すごい話ですね。

福澤：吉川さんという町長の時代 (註2) に教育長になって。よく学校の先生が来ていました。

持田：教育長されていた方は福澤なんとおっしゃるんですか？

福澤：福澤源太郎。

持田：お父さんはいつ生まれたんですか？

福澤：大正7年 (1918年)。

持田：お母さんは？

福澤：うちのお袋は〔大正〕11年 (1922年) かな。十勝の婦連協の会長とかね。有名人で。

持田：文化人家系だったんですね。

福澤：札幌に来て知っている人がいて、僕は全然そういうのにタッチしていないんだけどうちの女房が結構人付き合いのいい人で、その中に必ずうちのお袋を知っている人がいた。すごかった

からね。恥ずかしいくらい。

持田：ご家族はご両親と、ご兄弟は何人なんですか？

福沢：兄弟は4人です。

持田：4人兄弟のご長男になるんですか？

福沢：4人兄弟の2番目の長男。

(2) 事業内容

持田：バット工場は株式会社になったのは昭和33(1958)年ということですがけれども、それ以前からバットの製造自体は細々とやられていたんですか？

福沢：〔バット製材見本(図2)を示して〕もともととはここまで。

持田：製品として一貫になるのは株式会社になってからですか？

福沢：それはね、昭和52(1977)年。

持田：かなり後になってからですね。

福沢：学研(註3)ってありますよね、そちらの要請で作ったんですけども。

持田：学研の要請ですか。

福沢：子どもに知育、徳育と体育というのがテーマですね。その要請でやったんですけども。ソフトボールとか高校野球〔のバット〕が木製から金属に変わった時代でもあった。それでプロ野球用のバットと、大学野球とか社会人は木製でもよかったし、プロ野球でも圧縮バット…

持田：圧縮バット？

福沢：王さんが圧縮バットでホームランを相当打って。プロ野球の原材料っていうのはアオダモ(註4)の木がほとんどなんですけども。

持田：当時はアオダモはここで結構自生はあったんですか？今はあまり見ないですけども。

福沢：そうですね。十勝とか日高とか釧路の方とか(註5)。

持田：太平洋側にアオダモは多かったんですね。今ね、道有林が原木確保のため…(註6)

福沢：そうですね。プロ野球でも植林をやったり。

持田：アオダモはバット以外にも使う木なんですか？

福沢：いや、あのすぐく成長が遅く細い木で普通は。〔バット製材見本(図2)を示して〕これはタモの木ですけども、この場合丸太で4本くらい取るためには21cmから24cmは必要なんですけど。アオダモの場合には、成長がそんなにしない

ので18cmくらいからなので貴重なんです。24cmくらいまで成長するのを待てば、相当一本当たりの取れ高は増えるんですけどもね。

持田：アオダモのいい点というのはアオダモのどういう点ですか？

福沢：やっぱり粘りとかそういうものだと思うんですよ。

持田：それは加工にあたっての利点ですか？

福沢：いや、道具として打つときに。

持田：打つときの粘りというのは当たったときの反動という意味ですか？

福沢：たぶんそうだと思います。

持田：ボールが来て反発するときのバウンド力といいますか、それがアオダモは優れているということなんですか？

福沢：本州ではトネリコという木(註7)。

持田：ヤチダモ(註8)は使わないんですか？

福沢：基本的にヤチダモ。

持田：高級材としてアオダモを使うということなんですか。ヤチダモはかなり太くなりますもんね。この辺もいっぱい生えているけど。

福沢：太くてもダメで、どっちかっていうと30cm。

持田：中がある程度詰まっているしっかりした木じゃないとダメだと。バットを作っていたのは昭和52(1977)年くらいから、製品まで作るようになっていつぐらいまで？

福沢：その前は僕は記憶ないんですけども、最終まで仕上げなかったけども〔バット製材見本(図2)を示して〕ここまで仕上げた時代はあったみたいですよ。ただ自分ではわからないんですけど。

持田：最後お辞めになったのは何年くらいですか？

福沢：えっと、もう、資金繰りに追われてっていうか。結局売れ筋が学研に頼まれて作ってたやつだから。そこがダメになったら。

持田：なるほど学研との関係で。

福沢：それでもいろいろ営業かけて、この刻印されるやつ(図6)ですね。シルクスクリーンって、いま、サクシンなんかで作ってる。



図6 シルクスクリーンによるバットのブランド表記

持田：美術作品なんかでつくっているやつ。

福沢：あれと同じ原理の。あれが25枚くらいあったから、要するに25くらいブランドというか相手があった。で自分で作る技術も身に着けたかったけどなかなか…。帯広の専門業者に頼んで。

持田：帯広の業者さんに版を作ってもらって。覚えていますか、この辺のマークとか。こないだも一人、町の方がこれ福沢さんのだと思っただけどって持ってきたら同じマークなんで、たぶんそうなんだろうなーと思うんですけどね。

(3) 工員や出荷について

持田：バット工場というのは十勝では、少なくとも浦幌では福沢さんのところだけですか？

福沢：いや、十勝では今やっているのは山内さんっていう（註9）、原料をたしかミズノに入れてたんじゃないかな。うちのバットは基本的には富山県に行って、あと、福井の武生の丹羽製作所に入れていた。今は買収されてゼットになっていますね（註10）。

持田：みんなだんだんそういう風になっていくんですね。

福沢：今はやってないとおもうんだけど、中野さんて帯広の、そこはバット以外のものを作り始めて。今の何十年も前の話になっているけど。

持田：浦幌では福沢さんのところだけ？

福沢：そうです。

持田：作ったものは浦幌から貨車積みして運ぶんですか？

福沢：ええ。原材料のね。

持田：ああ、製品になる前のものということですね。

福沢：製品はコンテナで送っていたんですけども。それで貨車よりもトラックでやるようになって。まだトラック野郎っていう時代でしたからね。たくさん積んでもらわないと運賃が高くなってしまいます。そしたらやっぱりね、こんな話したらおかしいけれども、ヤクザっぽい人の方がやってくれるの。

持田：そうなんですか。

福沢：そういう人にね、機嫌よくさせて。でもそういう、後に大手を通じてトラックを手配するようになったときに、やっぱりそういう人を使って

たよ。やっぱり仕事はやってくれるんだ。

持田：仕事をきちっとやってくれるし、柔軟に対応してもらえるとということですね。なるほどな。

福沢：そんな表向きの話じゃないけど。

持田：バットを作り始めた時はバット専業ですか？他のものも作ってたんですか？

福沢：うーんとね、スキーの板とか、原材料とか。それはほとんどすぐに無くなって。

持田：そうですか。これはあれですかね、結構人手がいる加工なんですかね？

福沢：手がいるね。

持田：当時工員さんは何人くらい働かれていたんですか？

福沢：あの時は、30人は超してたね。原材料だけだったら2、3人いれば。

持田：仕上げに持っていくのに人手がかかるんですね。みんなだいたい高校出たら入ってきてずっと働かれるんですか？

福沢：中学出たら。

持田：じゃあ本当に若いころから技術を磨いて、だんだん職人さんになっていくんですか？

福沢：うん。

持田：そういうのを教えていたのはお父さんになるんですか？

福沢：いや、父親は全くそういうことはしない。

持田：どこかから引き抜いて来たんですか？

福沢：あの一、農協にいたアカマさんのお父さんが。

持田：その方は元々何をされていた方だったんですか？

福沢：いや一、わかんないけど炭鉱にいたって話を聞いたことがある

持田：そうなんですか。そのあとはこちらの工場に入られてみなさんの指導をされたんですね。

福沢：あとそのあとはイイダタケシさんとか。

持田：なるほど。じゃあそういう腕の利く方に入ってもらって職人を育ててもらってということですね。こういうのは等級とか評価というのはあるんですかね

福沢：ありますね。出荷するときに全部ダメなもののはじかなければならない

持田：それは検査みたいなのがどこかから来るんですか？スポーツ協会みたいな。

福沢：来るというか、こっちに任せてもらう所もあれば同業者の組合みたいところでやる所も

あった。

持田：出荷時に仕上がりを検査してダメなものをどんだんはねていくと。

福沢：うちでだいぶ納めてたところはね、本州にいつてからはねられる。何本ダメだったとか。

持田：結構その段階ではじかれちゃったりもするわけですね。

福沢：木材関係の最終製品の規格は木材の相場が変わるわけではないから、製材されたものというのは原木が高くなったら厳しくなるんですよ。高くなったからもうちょっと緩やかになってもいいんじゃないかと。だから安くなったら緩くなる。

持田：これ(図2)ちなみに何と呼ぶんですか？

福沢：とくにはなかったと思う。

持田：バット製造で一番苦勞される点は？アオダモとかだと取れる量がというのはあるのではないですか？

福沢：やっぱり歩留まりが一番。実際にやる人も歩留まりを気にしながらどうやって丸太の姿を見て、丸太のどこを見て入れるかで決まってくる。それができる人がやっぱり優秀ということになる。0.5本ということはないわけですよ。1本でなかったら。その1本をとるとするのはすごいおっきなことなんですよ。

(4) 工場の概要

持田：正式名称は「福沢製作所」というんですね。みんな福沢バット工場と言っていましたけども。屋号がマルサなんですね。元々の〔旭川の〕齋藤さん(註1)の。

福沢：そうですね。

持田：福沢製作所のころの時代のことでこういう事故があったとか、こういう賞をもらったとか、何か記憶に残っていることはございますか？

福沢：まあ、うち、ほとんど大きな事故を起こさなかったことと、火事を起こさなかったことが自慢です。というのも、夜遅くまで火を使わないようにしてた。寿町の住宅街の中にあったから(図7)。ボイラーやったりとかがクレームになったりとかね。



図7 福沢製作所全景(資料番号2020-294の一部)

持田：臭いとかけむりとかですね。これは工場はずっと三交代制で？

福沢：いえ、それはないです。昼間だけで。休みの日もやったりとかはあったかもしれない。

持田：なるほど。こういったことに気を使って事故や火事を起こしていないというのはすごいですね。浦幌、火事多いですもんね。いろんな会社が火をだしたりとかあったから。

福沢：工場の火事とか結構あったからね。

持田：社員の方は寮に入られていたんですか？

福沢：寮も工場のとこにあったこともあったんですけどみんな出ていって。最後はタダで住んでもらって、夜回りだけしてもらって。工場の土場を。

持田：家賃はタダでその代わり工場の土場を見回りでくださいと。面白いですね。

福沢：そんな立派な事務所とか休憩室も無く、全体である中の一角に寮みたいにしてた。で会社の人みんな手伝ってたまたま頭下げて入ってもらって。

持田：なるほど。『浦幌商工ガイド』(浦幌町商工会1979)を見ると、福利厚生があって互助会があって年一回旅行があったり釣り大会があったり。釣りは珍しいですね。あと観楓会があったり。社員みんなで出かけたりというの。釣り大会というのはなんですか？海ですか？

福沢：釧路や白糠とか音別とかあっちの方に行ってやったことがありますね。

持田：観楓会は阿寒とか岩内ですか？

福沢：観楓会はここですね。旅行なんかは遠いとこだと函館とかに行きましたね。

持田：第一工場(図8)と第二工場(図9)というのがあったんですね。第一工場があらびきで第二工場では人工乾燥して仕上げたということですか？



図8 福沢製作所第一工場 (資料番号2020-294の一部)



図9 福沢製作所第二工場 (資料番号2020-294の一部)

福沢：そうですね。

持田：同じ敷地内にあったんですか？

福沢：そうですね。寿町の公園に児童公園というのがありますよね。そこの隣だったんです。

持田：これ昔は切った木材は馬で運んでいたんですか？

福沢：いやそんなことはない。

持田：トラックですか？

福沢：そうですね。ただ、農家の畑の周りにヤチダモがあって、何本か切ったから取りに来てくれたのがあって。

持田：農家さんからですか？

福沢：ええ。そういう場合には手積みですよ。学生時代とかやっていた。

持田：じゃあトビとかガンタとかそういう道具を使いながらやられていたんですか？

福沢：もともとそういう長さも。たしか2m～2m40cmくらいで。2人で。

持田：農家さんから買い取るということですか？

福沢：はい。それは浦幌に限らずで。

持田：自分の会社のバットが使われているところとか見に行ったりされたんですか？

福沢：中学校とか小学校とかに寄附して。

持田：ご自身も野球はされるんですか？

福沢：見るだけ。小学校ぐらいまでしか。小学校のときに三角野球とかそういう時代でしたね。最初は下手でもやらせてくれるけど、だんだんとクラス対抗とかになってくるとね。

(5) バット製造をやめてから

福沢：役場の人もかわいがってくれた。商工会の青年部もやっていたから。

持田：なるほど。商工会も当時はいっぱいいたでしょうからね。

福沢：40人以上いた

持田：林業関係だけでも、飯山鉛筆工場にいた方に話を聞いたんですけど、製材業だけでも結構な数があったんですもんね。

福沢：えんぴつ工場がありましたね。

持田：最後の方はお箸やアイスの棒などを作ったりしたと。でもえんぴつほど儲からなかったという話はされていましたね。

福沢：飯山さんは誰ですか？

持田：飯山さんの工場にお勤めだった楫省造さんという方から。これ(図3)も楫さんから寄贈いただいたんだな。

福沢：楫省造さんの弟さんが同級で。JRの札幌で出世頭で。現役のとき札幌で一回あったことがあるけれど。

持田：そうですね。当時の山関係とか林業関係の方とは付き合いはあるんですか？

福沢：もうなくなっちゃったね。

持田：当時の会社の記念誌みたいなのは作られていたりしますか？

福沢：ないですね。

持田：当時の写真以外にも会社の名前がはいっている手ぬぐいなどがあつたらお借りできればと。

福沢：いやー、引っ越し何回したか。倒産して再建して。設備が、もうその時は製材工場で、大手の木材商社の下でやってたんだけども。もう40過ぎたときに設備投資をしなきゃならんということで、一回倒産して金もない状態で。うちの設備は東栄木材さんの工場に全部うつして、従

業員だけおねがいして、僕は何回か従業員が東栄木材に定着するまで行って、定着したところに職探しに東京まで行って。それで知り合いの会社に入れてもらって。倒産したけど自分で経営をやっていた経験というのは生かされた。いろんところで働いたけれども、常に人を使う立場で働いた。表現できないけれども、いろんな経験を工場で出来たんだなど。

持田：きっとそうですね。倒産なさったのは何年くらいになるんですかね。

福沢：昭和53（1978）年生まれの子が小学校一年のときだから、〔昭和〕59（1984）年だね、たしか。いつヤクザもん来るかわからないからって、それで子どもを預かってくれるところがあって、3人の子どもを預かってもらって。

持田：それは大変なご苦労をされていますね。産業が斜陽化していく理由はいろいろあるかと思うんですけれども、産業構造の変化ですか？

福沢：そうですね。

持田：外材とかそういうことですか？

福沢：バットで外材というのはその当時はほとんどなかった。ただ、バットから製材に切り替えた時に、北洋材（註11）って言って今のロシアとかそういったものを中心に北海道じゃなかなか上手く手はずできないというかね、やっぱり時期があるんですよ。そうすると冬に山から切ったやつは春まで動かない。商社系の人が動かさないから。それで春先になって木が出てこないような時期からちょっと高めに売ってくる。そういう時期に北洋材を苦小牧とか釧路とか、夏でもいきますけどね。ここのところは、三井物産というところがね。

持田：三井林業さんは今も厚内の方に林がありますもんね。

福沢：ここでは当時は木下林業さんが取り仕切っていました。農大出の若い頭のいい人がたくさん、こちらとはレベルが違うなど。それがこちらに来てね、実際に現場を手伝うんだから。たいしたものだな。大企業の系列の会社なのに。助けられましたよ。その頃にね、パークゴルフを今のニッタックスに声をかけられて。ボールを作らないかって。ただ、木を圧縮する技術がね。日本でもトップレベル級だから、そこがね、今回作れてよかったなって。作ったもので、福井

県にあるシャトルっていう会社の繊維機械に使うものがあるんですよ。そこがやっぱり曲げたりする技術を持っていて、木材の技術を持つ会社とつながりができたんだけど、力尽きて…

持田：いい話にはなりかけたんだけど、ということなんですね。本業のバットがうまくいなくなっていて、で別の業種にした時にもうまくいかなかったということなんですね。

福沢：これ以上は深入りしない方がいいということで。

持田：バットは学研さんの取引がなくなって、安定した取引先がなくなったということが大きいんですか？

福沢：そうですね。

持田：あとは金属〔バット〕にだんだんなくなっていったとか、需要そのものがなくなっていったと。

福沢：ソフトボールのバットがなくなったというのも。ソフトボールや少年野球のバットは細いから、欠点を取り除けるという利点もあるんですよ。例えば、節の跡とか、こういうのは短いバットだったらできるし、細いバットだったら無くせないかとかね。

持田：これは少年野球だったら使えるけど、プロ用のバットだとなかなかそうはいかないと。

福沢：だからそういう3段階に素材を活用できたのが、結局ランクが一番上のものしか使えなくなっていった。木材が原材料だけで木材の町というのに対して、鉛筆工場にしても東洋木材ならフローリング工場にしても、チャレンジして、飯山さんは鉛筆から箸までやって、東栄木材にしてもフローリングから木材の合板みたいなのがつくれば細かいものも作れますよね。結局生き残ったのは原材料に近い人たちだね。

持田：付加価値付けて製品の方にいくという所はやっぱり…

福沢：付加価値付けようと思っても結局うまくいかなかった。

持田：たとえばボールを作るとか普通の発想ではなかなか出ないところまで模索しなければならぬという…

福沢：芽室のゲートボールも全国的に広がって、結構素材の注文は内地の方から来ていましたよ。それでパークゴルフになったときに、さきほど

言った話がきて、その道の方と仕事終わったら毎日、今はやっていないけど幕別まで若い人とパークゴルフしに行きましたよ。だからそんな広まる前だったけれども、企業がそこまで挽回できなかったという…

持田：タイミング的に過渡期でなかなか本格的には…

福沢：少子高齢化のこともあって、報道される前に人口の動態を調べたらどうやっても年寄り向けの商品が必要だということで、パークゴルフとか絶対間違いはないという話だったんだけども。

持田：惜しかったですね。

福沢：だからそれをやるときにはもうちょっと市場調査が必要だったんだね。

持田：バットの？

福沢：ええ。たしかにそういう技術の延長上に置かれているものが結び付いたのだと思うんだけど。こっちで足を引っ張られた分、こっちの希望が少なくて済むような段階だったらまだ、そのまま出てきたものに追いつけたのかもしれないけどね。

持田：向こうの規格に引っ張られるのではなくて、こちらの規格である程度共有できる形であればというね。結果的にはバットで足を引っ張ってしまったと。

福沢：その頃の学研といたら超優良企業で。

持田：学習研究社ですよ。

福沢：ええ。

6. 福沢製作所の系譜

持田：バットは、福沢製作所としては親子二代でやっ

ているんですか？

福沢：おじさんに当たる福沢弥太郎という人がいたんですけど、54歳で亡くなって。朝から浴びるように酒を飲んでいて人で。肝硬変でなくなっただけ。

持田：その方は戦前にやられていたんですか？

福沢：僕が実務的にやっていた。町の人からは人気があって、人をまとめたりとか。

持田：この方も創業者になるんですか？

福沢：ええ、形の上では。

持田：実質は源太郎さんという方がやられていてそれを引き継いだということなんですね。三代に渡ってということですね。石川県からやってこられたのは弥太郎さんの時代ですか？

福沢：もっと上ですね。おばさんに当たる人が明治43年か44年(1910-11)か。その人のお腹に入っている時に来たって言っていましたから。うちの父親が旭川の小学校に入って、それからそのおばさんは南富良野の幾寅だとかに入って遊んだとか。そっちの方でも山があって木を切っていたんですね。そのときは未だ独立はしていませんね。独立したのはあくまでも浦幌(註12)。

持田：齋藤木材との関係であったところですね。浦幌に入られたのは戦前ですもんね？

福沢：ええ。

持田：昭和のはじめくらい？

福沢：だと思んですけどね。さっき言ったおじさんは昭和2(1927)年生まれです。そのときはもうこっちに来てたんじゃないかと思います。

持田：どうもありがとうございました。



図10 福沢製作所工場風景(資料番号2020-294の一部)



図10 福沢製作所工場風景 (資料番号2020-294の一部)

図11 福沢製作所とバット製造について紹介する雑誌『週刊エコノミスト』(複写)

註

註1) 戦前、旭川市に本社を置き、北見、富良野、遠軽等に工場を置いていた齋藤木材株式会社のこと。『富良野市史』によれば、「空知川上流の木材資源の中で、造材業から身をおこした人に齋藤弥三郎がいる。相田仁太郎よりも少し古い時代の落合で基礎を築き、旭川で齋藤木材株式会社を起したが、木材業界での成功者であった」とある。『富良野地方史』によれば、齋藤弥三郎が「南富良野落合で造材業者として基礎を築き、旭川市で齋藤木材株式会社を起こして成功」したとされる。なお、『富良野市史』『富良野地方史』には、相田仁太郎は1906(明治39)年に南富良野町落合へ入って王子製紙の下請けをしたとされているので、齋藤弥太郎が落合で業を始めたのはそれ以前と考えられる。1924(大正13)年に東京支社を置くが、東京支社が1930(昭和5)年に独立。この独立した東京の齋藤木材株式会社が現存しているほか、各地に独立した木材会社が今も経営を続けている。

註2) 吉川利昌。1947(昭和22)年に旧浦幌村の第十二代村長となり、1954(昭和29)年の町制施行を経て初代浦幌町長となった。第2代町長に佐藤雪守が着任するまで町長を務めた。

註3) 学習研究社。「学研」の略称で知られる。1946年(昭和21年)4月に設立された学習研究社を母体とし、翌年1947(昭和22)年に東京都品川区平塚町八丁目1204番地に本社を置く株式会社となった。学習雑誌の発行のほか、幼児教育の基本とされる「知育＝頭の教育」、「徳育＝心の教育」、「体育＝体の教育」の考え方にもとづき、知育玩具の開発・販売などに取り組んだ。学研は、1994(平成6)年にホビーカルチャー事業部・レジャー玩具事業部を分離独立させ、株式会社学研トイホビーを設立。2006年には社名を「学研ステイフル」に変更した。2023年からは出版取次大手の「日本出版販売(日販)」の子会社となったが、現在も学研の系譜を引く知育玩具の開発・販売を手掛けている。

註4) アオダモ *Fraxinus lanuginose* Koidz. f. *serrata*

(Nakai) Murataのこと。モクセイ科の木本で、南千島以南の日本列島全域に分布する。植物学的には、ケアオダモ *Fraxinus lanuginose* Koidz. f. *lanuginose* を基準品種とする2品種に識別されるが、現場ではあまり区別されることはない。

註5) 高倉(2007)は、アオダモ原木については「十勝管内ではわずかに浦幌近辺にみられるだけ」と記述している。

註6) アオダモの供給は天然資源に依存してきたことに加え、近年のエゾシカによる食害の影響もあり、資源枯渇が危惧されていることから、森林総合研究所や北海道および野球関連団体で人工林の造成に向けた取り組みが進められている(高倉2007)。

註7) トネリコ *Fraxinus japonica* Blume ex K.Kochのこと。アオダモやヤチダモと同じくモクセイ科の木本で、日本では本州の中部以北の山地に分布し、北海道には自生しない。

註8) ヤチダモ *Fraxinus mandshurica* Rupr.のこと。モクセイ科の木本で、南千島から本州までの湿地に生育する。

註9) 中川郡本別町北6丁目操業する有限会社山内バット製材工場のこと。

註10) 福井県武生市(現、越前市)に本社を置いていたバットメーカーの丹羽製作所は、1997年8月にスポーツ用品卸のゼット株式会社と合併し、ゼットクリエイティブ株式会社武生工場となった。

註11) ロシアのシベリア地方で産出され輸出される木材のこと。1920年代から、当時のソビエト社会主義共和国連邦産の日本への木材輸出が始まった。第二次世界大戦時に中断したが、1954年(昭和29年)に再開し、長らく日本の木材需要を支えてきた。2010年以降は、日本への木材輸出は激減している。

註12) 『浦幌町議会史』によれば、福沢源太郎(初代)は浦幌町議会議員を1926(大正15)年6月から

1928（昭和3）年5月まで勤めている。

註13)『富良野町史』によれば、南富良野町の幾寅は註1に記述の相田仁太郎の木工場（相田木工所）と、その前身の幾寅木工所があったことが記されている。

引用文献

- 浦幌町議会史編集特別委員会，1991，浦幌町議会史。浦幌町議会。
- 浦幌町百年史編さん委員会，1999。浦幌町百年史。浦幌町役場。
- 浦幌町史編さん委員会，1971。浦幌町史。浦幌町役場。
- 浦幌村社会教育協会，1949。浦幌村五十年沿革史。浦幌村役場。
- 浦幌町商工会，1979。うらほろ商工ガイド。浦幌町商工会。
- 富良野市役所，1969。富良野市史第2巻。富良野市役所。
- 岸本翠月，1969。富良野地方史。富良野地方総合開発連絡協議会事務局。
- 関矢礼二，1983。（統計風土記25）いまや希少材のアオダモ 野球バット。週刊エコノミスト，1983年10月4日号：72-79。（図11）
- 高倉康造，2007。バット材に適するアオダモ遺伝資源の保存。林木遺伝資源情報，71: 1-2。
- 脇田健史・松下幸司，2015。野球用木製バットの材種と流通。森林応用研究，24（2）：19-27。